

「理由」——ノン／フィクションの境界と「不安」の様相——山根由美恵

直木賞受賞作「理由」(98)は、億ションで起こった四人の殺人事件の究明を架空のノンフィクションという方法で語った、宮部みゆきを代表する社会派ミステリーである。「理由」の特徴ともいえるルポルタージュ風の語りについて、宮部はインタビュアーでカポーターの「冷血」(65)に影響を受けたと語っている(「まるごと宮部みゆき」朝日新聞社、02)。同インタビュアーにおいては、インタビュアーが「理由」と村上春樹「アンダーグラウンド」(講談社、97)との近似性を指摘している。また、宮部は「模倣犯」(01)においてマイケル・ギルモア「心臓を貫かれて」(村上春樹訳・文藝春秋、96)に触発されたとも語っている。本稿では、「理由」・「冷血」・「アンダーグラウンド」・「心臓を貫かれて」を比較するという方法で「理由」の特徴を捉え、そこからノン／フィクションの境界について考えてみたい。

「冷血」は、アメリカ中西部キャンザス州ホルカムで起こったクラター一家四人惨殺事件について、膨大なデータ収集および整理に五年間をかけて描いたノンフィクション・ノベルの大作である。作者が感情移入したのは主犯ペリー・スミスであり、ペリーの「冷血」な心境を描くことに作者は集中していた。ペリーは殺人について、「わたしが申しわけないと思っっているかって? もしきみのいうのがその意味だったら、それはちがうといいたいね。わたしはそのことについて、なんとも感じちゃいないんだ。感じられたらいいんだがね。しかし、そ

のことでは、わたしはちっとも煩わされたりしないんだ」とその「冷血」ぶりを冷静に語っている。

ペリーと同様に、「理由」の殺人犯・八代祐司は家族という血のつながりを否定し、血の通っていない人間(レプリカント)として描かれている。八代の子を私生児として出産した宝井綾子の弟・康隆は、八代について次のように考える。「人を人として存在させているのは「過去」なのだ、康隆は気づいた。この「過去」は経歴や生活歴なんて表層的なものじゃない。「血」の流れだ。あなたはどこで生まれ誰に育てられたのか。誰と一緒に育ったのか。それが過去であり、それが人間を二次元から三次元にする。そこで初めて「存在」するのだ。それを切り捨てた人間は、ほとんど影と同じなのだ」。宮部作品は「家族」がキーワードであると評されているが、八代は、虐待を受けてきた自身の家族の元から家出し、綾子の妊娠において自身の子を認知せず、さらに、家出以来一緒に暮らしてきた疑似家族を惨殺する。八代は何重にも「家族」「過去」というつながりを否定する人間として描かれている。しかし、「理由」の場合、八代の冷血さは本人の談ではなく、周りから語られている。宮部みゆきは悪人を書かないと評されるように、八代の人物と人生、更には殺人の動機といった最も肝心な部分の描写が希薄である。殺人犯の歪んだ心理を克明に描いた「冷血」の圧倒的な迫力と比べると八代は存在感が薄い。逆に50人以上登場する登場人物には個性と人生が与えられ、一人残らず克明に描かれ、事件をめぐる人間の重厚なドラマが展開されている。「理由」の特色は、周辺人物の描き方の緻密さにあると評している。

そして、「理由」は、「冷血」よりも恐ろしい側面がある。それは「冷血」のペリーは特殊な人間であって、自分とは関わらないと思わされるのに対し、八代の予備軍は現実存在しているとマンシヨンの住人・葛西美枝子に語らせていることである(今の若い人なんて、みんな八代祐司の素因を持ってるんですよ、(「この人たちにとって、八代祐司は、全然異質の怪物みたいな人間なんですよ。本当はそうじゃないんだけど、今はまだそう思っていたいのね)。これを受

け、物語のラストでは、小糸孝弘少年が自分は八代と似た側面があると語り、次のような重い問いを投げかける。(僕がおばさんたちとずっと暮らしていったら、やっぱり成人しておばさんたちが邪魔になったとき、僕もおばさんたちを殺したんだろうか)。少年が自身も八代のように人を殺してしまう可能性があるのかと問わずにいられない状況。これはフィクションのみならず、現実の世界に不穏な空気が生まれ始めていたことと呼応している。「理由」の前年に出版された「アンダーグラウンド」において語られるサリン被害者の言葉には、もちろんオウムへの怒りが多いのだが、同程度にオウムという集団の気味悪さと、彼らを生み出していった社会構造への不安が語られている。オウムは荒唐無稽で、残虐、一般的には受け入れがたいものとして捉えられ、自分たちとは違う人間としてカテゴライズされている。しかし、そういった人間は少しずつ増殖しはじめてもいるのである。「理由」で語られた八代祐司の素因を持つ若者たちの存在、「僕もおばさんたちを殺したんだろうか」と問わずにはいられない少年孝弘。「理由」、「アンダーグラウンド」が刊行された時期は、このような不安が生まれ始めた時期でもあった。

宮部は先のインタビューにおいて「模倣犯」を書く際に「心臓を貫かれて」にインスパイアされた部分があると語っているが、「理由」にも「心臓を貫かれて」と同質の問題が含まれている。「心臓を貫かれて」は、二人を惨殺し、自ら死刑を求めたゲイリー・ギルモアの実弟・マイケル・ギルモアが、兄・ゲイリーを生み出した要因を自らが血を流すようにして調べ上げたトラウマのクロニクルである。この書の最も苦しい真実は、人間を破壊させるのは、烈しい愛と憎しみからくる暴力の連鎖であり、ある地点を越えてしまったトラウマは回復不可能である、ということである。それはギルモア一家のみの問題ではない。ゲイリーの兄、フランクは次のように語っている。(この国(注 アメリカ)では何万、何十万っていう数の人間が同じような人生を送っているんだ。そし

て、そういった連中の多くはゲイリーと同じような道を歩むことだろう。同じように人を殺し、同じように死んでいくだろう。刑務所に長いあいだ放り込まれて、恐怖と残虐をたっぷり味わうことで、彼らの人間性は根本から変えられてしまう。もう後戻りすることのできないところまで行ってしまふんだ)、(誰でもいい、何か問題を抱えた子供を選んで——感情的な問題でもいい、あるいは家庭の問題でもいい——世にも恐ろしい少年院なり刑務所なりにしばらく放り込んでみるといい。その子供はおそらく、ゲイリーみたいな人間になってしまふことだろう。/ゲイリーはもう後戻りできない地点に到達していた。あいつが求めていたのは死による解放だった)。ここには「理由」で語られていた不安と同質のものがある。

「アンダーグラウンド」「心臓を貫かれて」はノンフィクション、「冷血」はノンフィクション・ノベル、そして「理由」はルポルタージュ風のフィクションである。これらの境界は驚くほど曖昧であり、現代社会が抱える同質の問題を描き出している。特に「心臓を貫かれて」は96年、「アンダーグラウンド」は97年、「理由」が98年と発表年も近似している。この時期、突然襲いかかるかもしれない暴力の根が身近に息づいており、見えにくく、捉え難いことから生まれる不安が、ノン/フィクションの壁を越え、共有されていた。その後、宮部は「模倣犯」で八代的モンスターを追究し、一つの頂点に達することになる。

(広島国際大学非常勤講師)

注 谷川充美氏は「宮部作品の特徴は、先に指摘したようなミステリーの常套的な技法を駆使しつつ、海外のミステリー作品からも積極的に新しい技法を取り入れながら、一貫して日常性に重きを置いて、人間のもっとも身近な共同体である「家族」を重要なモチーフ、あるいはテーマとしている点にある」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』2006)と的確に評している。